自由大学運動の９０年

－自由大学研究史を回顧して－

山野　晴雄

私の報告は、午後からの研究発表のいわば前座として、私自身、自由大学研究をどのように進めてきたのかをふり返りながら、40 年以上にわたる自由大学運動に関する研究成果がどのようなものであるのかを、私なりに跡づけてみたいと思っています。

１．私の自由大学研究

（1）上田への史料調査

私が修士論文作成のために長野県上田市へ史料調査に行ったのは 1971 年 8 月のことでした。

当時、大正デモクラシー研究は、吉野作造の民本主義、米騒動、普通選挙運動などに関する研究が中心であり、地域社会レベルで地域民衆がどのようにデモクラシー状況をつくりだしていたのかという研究はほとんど行われていませんでした。私は、大正デモクラシー研究を志してはいたものの、具体的な研究テーマは決まっていませんでした。そのようなときに恩師の鹿野政直先生より、上田市史編さん委員会編『上田近代史』（上田市、1970 年）を紹介され、長野県上田・小県地域では、農村青年たちを中心に、信濃黎明会による普選運動や自由大学運動、山本鼎による農民美術運動や自由画教育運動など、多彩なデモクラシー運動が展開されていることを知りました。そこで 71 年 8 月、『上田近代史』に「民主社会への岐路」を執筆された小林利通さんを訪ねることと上田自由大学を中心に史料調査をすることにしました。このときは、小林利通さんと当時博物館長であった岡部忠英さんとお会いし、

自由大学運動を中心に関係者や史料の所在等について教えていただき、とくに岡部さんからは、大正期の「信濃自由大学会計簿」、「自由大学雑誌発送簿」、昭和期の「上田自由大学会計簿」をコピーさせていただきました。また、上田市立図書館に所蔵されている自由大学関係の諸資料を閲覧しました。その後、11 月には、当時山本鼎記念館長をされていた自由大学関係者である山越脩蔵さんからの聴き取り、保存されていた関係者の書簡類の写真撮影を行うとともに、自由大学関係者である猪坂直一さんの聴き取り、上田市立博物館に所蔵されている時報類の調査などを行いました。

この史料調査をもとに修士論文作成のノートとして、上田自由大学の生成から経過、終焉までの過程をまとめたのが、「上田自由大学運動研究ノート」（『民衆史研究』第 10 号、1972 年）でした。

(2) 自由大学研究会との関わり

自由大学研究会は、1971 年 9 月、小川利夫さんや黒沢惟昭、小林利通さんが中心となり、「自由大学運動の歴史的遺産を発掘し、その今日的な継承と発展をはかる」ことを目的に結成されました。

私は、1971 年 8 月、小林利通、岡部忠英さんとお会いしたさいに、小林さんから「自由大学研究会を結成するので、日本近代史を研究されているならぜひ、入会してほしい」と誘われました。これが自由大学研究会と関わりを持った最初でした。

その後、1972 年 9 月に駒澤大学で開催された日本社会教育学会研究大会のおりに、黒沢さん・小川さんとお会いし、研究会の持ち方について意見交換をしました。

1974 年の『自由大学研究』第 2 号の編集から研究会の運営に関わるようになり、1975 年、小林さんより事務局長を引き継ぎ、1986 年に活動を停止するまで、事務局を担当しました。事務局を担当するにあたり私は、研究会の活動について、自由大学運動の資料発掘・紹介と、その歴史の再構成を中心的な研究課題として活動を進めることにしました。そして、年 2 回の研究例会の開催（1973 年 10 月から 12 回開催）と年 1 回の機関誌の発行（『自由大学研究』を第 9 号まで、別冊 2 冊を刊行、他に『自由大学研究通信』を第 7

号まで刊行）をしてきました。また、『伊那自由大学関係書簡』（1973 年）の刊行や『自由大学雑誌』復刻版（1976 年）、『伊那自由大学第1号』復刻版（1978 年）の刊行も行いました。

1981 年には、10 月 31 日・11 月 1 日の 2 日間にわたり自由大学運動 60 周年記念集会を上田市で開催しました。この記念集会を持つことにしたのは、講師や聴講者など自由大学関係者の方々が高齢になり、証言を聞くことが出来る最後の機会になるだろうということと、1970 年代に蓄積されてきた自由大学研究の総括をする機会にしたいと考えたからです。記念集会には、タカクラ・テル、新明正道、松沢兼人さんや、山越脩蔵、猪坂直一、深町広子、福元多世、佐々木忠綱、林源、北沢小太郎さんら当時の自由大学の講師や受講者をはじめ、全国から 120 名を超える参加者があり、成功裡に終えることができました（集会報告については、山野「自由大学運動と現代－自由大学運動 60 周年記念集会を開いて－」『月刊社会教育』1982 年 1 月号などを参照）。

(3) 上田自由大学の史料調査

その後、上木敏郎さんからは土田杏村やタカクラ・テル関係の史料、土田寛（土田杏村の息子）さんからは土田に宛てられた書簡類や「杏村日記」などを見させていただきました。また、上条宏之さんからは長野県政史刊行会所蔵の「長野県知事引継書」等の閲覧や長野県における大正デモクラシーに関して教えていただき、天田邦子さんには上田自由大学の聴講者調査に協力していただき、聴き取りとともに「青木猪一郎日記」や新たな聴講ノートの発見をすることができました。中沢恵太（中沢鎌太の息子）さんからは聴き取りとともに「中沢鎌太日記」や聴講ノートなどを見させていただき、深町英夫・広子さんや井沢譲さんには自由大学だけでなく農民運動やタカクラ・テルとの関係などについても聴き取りをすることができました。また、信濃教育会研究所所蔵の「長野新聞」、永井大二さん所蔵の「上田毎日新聞」を閲覧することもできました。

こうした新たな史料調査により、上田自由大学の史実の発掘が進み、それをもとに 1928 年に再建された昭和恐慌期の上田自由大学についてまとめた

のが、山野「昭和初期の上田自由大学」（『自由大学研究』第 1 号、1973 年）で、のち「昭和恐慌と自由大学運動－上田自由大学を中心に－」と改題・加筆して『長野県近代史研究』第 6 号（1975 年）に再録されました。また、上田自由大学のほぼ 10 年にわたる歴史を再構成したのが、山野「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動－上田自由大学を中心として－」（『季刊現代史』第 8 号、1976 年）でした。

史料調査や聴き取りの一部は、深町広子「自由大学と私」（『自由大学研究』第 2 号、1974 年）、天田邦子・山野晴雄「（資料）青木猪一郎日記・中沢鎌太日記」（『自由大学研究』第 4 号、1976 年）、「自由大学関係者の証言(4)井沢譲」（『自由大学研究』第 8 号、1983 年）で紹介しました。

(4) 伊那自由大学の史料調査

上田自由大学に比べて史料調査、研究が遅れていたのが伊那自由大学でした。

大槻宏樹さんから聴講者の一人である楯操さんを紹介していただき、1972 年 8 月に飯田市を訪れました。飯田市立図書館では、下伊那郡青年会関係の史料や「南信新聞」等の閲覧とともに、館長の今村兼義さんから伊那自由大学や下伊那自由青年連盟の関係者について教えていただきました。楯さんからは聴き取りとともに、保存されている自由大学関係の文書や聴講ノートをコピーさせていただき、福元多世（平沢桂二の妹）さんを紹介していただきました。福元さんからは姉の横田千世（横田憲治の妻）さんのご自宅に自由大学関係の書簡類が保存されていることを教えていただき、その書簡類を全てコピーさせていただきました。

その後、代田保雄、林源、小沢一さんの聴き取りや法政大学社会問題研究所での下伊那社会主義青年運動関係の調査、須崎慎一さんからは森本州平文書のコピーを提供していただくなど、調査を続けました。

このような史料調査をもとに、横田憲治宛の書簡類や楯さんの保存史料などを収録したのが、山野編『伊那自由大学関係書簡』（自由大学研究会、1973 年）であり、伊那自由大学の歴史をまとめたのが、山野「伊那自由大学の歴史」（『月刊社会教育』1975 年 9 月号）でした。また、代田保雄さんと小沢

一さんの聴き取り記録は、「自由大学関係者の証言(1)代田保雄」(『自由大学研究』第 5 号、1978 年)、「自由大学関係者の証言(3)小沢一」(『自由大学研究』第 7 号、1982 年）で紹介しました。

その後、自由大学研究会では、1979 年 4 月に第 6 回春季例会を開催し、伊那自由大学関係者である林源、佐々木忠綱、北沢小太郎、吉沢清之、長尾宗次、楯操、福元多世さん、下伊那社会主義青年連盟関係者である羽生三七、山田邦夫さんに集まっていただき、証言の聴き取りを行いました。この座談会の記録は、「伊那自由大学の記録」として『自由大学研究』(別冊 1、1979 年）に収録しました。

(5) 魚沼・八海自由大学の史料調査

新潟県の自由大学運動については、森山茂樹さんの論文があるだけでした。そこで森山さんに渡辺はつ江（渡辺泰亮の妻）さんや中林昌平さんを、上木敏郎さんに中川杏果さんを紹介していただき、それぞれ聞き取り調査を行うとともに、渡辺泰亮宛の書簡類をコピーさせていただきました。その後、林広策さんの聴き取りや保存史料のコピー、下村正己（下村正作の息子）さんの聴き取り、新潟県立図書館所蔵の「新潟毎日新聞」、柏崎市立図書館所蔵の「北越新報」、堀之内町議会事務局所蔵の村会会議録の閲覧などを行い、また、新潟県史編纂委員でもあった佐藤泰治さんのご協力を得ました。

こうした史料調査をもとに魚沼・八海両自由大学の歴史をまとめたのが、山野「新潟県における自由大学運動(1)(2)」(『自由大学研究』第 3 号、1975 年、第 4 号、1976 年）であり、林、中川さんの聴き取りは、「自由大学関係者の証言(2)林広策」(『自由大学研究』第 6 号、1979 年)、「自由大学関係者の証言(5)中川杏果」(『自由大学研究』第 9 号、1986 年）に収録し、また、魚沼自由大学関係の史料の一部は「(資料紹介）魚沼自由大学関係資料」(『自由大学研究』第 6 号、1979 年）で紹介しました。

(6) その他の自由大学の史料調査

長野県では松本自由大学、上伊那自由大学の存在が知られています。松本自由大学については松本市立図書館所蔵の「信濃日報」等の新聞資料の調査

を行ったのみで、運営者の所在がわからなかったため、聞き取り調査などは行うことが出来ませんでした。上伊那自由大学についても、長野県史編纂委員であった小平千文さんに調べていただきましたが、史料は発見できず、新聞記事で知られる以外はわかっていません。

新潟県の川口自由大学については、佐藤泰治さんや安達朋子さんが調べられましたが、私自身は未調査のままになっています。

群馬県の群馬自由大学については、前橋市立図書館所蔵の「上毛新聞」等の調査を行い、運営者の名前も判明したことから、桑島辰平さんに聴き取りをお願いしましたが、すでに高齢で調査を行うことは出来ませんでした。その後、山口富造さんが中心となり、関係者の聴き取り調査を行いましたが、充分な聴き取りはできず、新たな史料収集も出来ないままになっています。

福島県の福島自由大学については、運営者の田口富五郎の名前はタカクラ・テルの書簡に出てきていますが、詳しいことはほとんどわかっていない現状にあります。

私の自由大学研究はこのようなものでしたが、次に戦後の自由大学研究の歩みを振り返ってみたいと思います。

２．1970年以前の自由大学研究

(1) 宮原誠一による注目

戦後、自由大学運動についていち早く注目したのは、宮原誠一さんの「日本の社会教育」(『世界の教育』9、共立出版、1960 年）でした。宮原さんは、自由大学運動を大学拡張運動の一形態としてとらえ、大正期における官製の成人教育に比較して「はるかに大学拡張の実体をもち、しかも純粋な民間運動であった点において世界的にも稀少な事例」であったと、高く評価しました。しかしこの段階では、まだ実証的な研究はされていませんでした。

(2) 宮坂広作による本格的研究

自由大学運動について最初に本格的な検討をくわえたのは、宮坂広作さんの「戦前における社会教育運動の遺産について」(『月刊社会教育』1962 年 11 月号・12 月号、63 年 2 月号・3 月号）でした。この論文はのちに『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968 年）に敷衍され収録されました。

宮坂さんは、このなかで、大正期における社会教育の官製化に対抗する民間の自主的な成人教育運動として自由大学運度を位置づけ、「自由大学運動は官製の「成人教育講座」のもっている天降り的、教化的性格と、一般の講演会、講習会のそなえている慈恵的、実用的性格とに反対して、自由な人格の自己形成と真実を探求する批判的知性の涵養をめざして、自主的な学習機関を組織した」ものと評価しましたが、同時に、「労働と教育との関係を単に外的に結びつけるだけで、「労働しつつ学ぶ」ことじたいに「学校としての本義」を置き、結局生産労働に内在する問題と講義内容とが遊離するところから、一種の教養主義に転落してしまった」と、教養主義の限界を指摘しました。この点について宮坂さんは、別の論稿「社会教育の体制化と民衆教育運動」（宮原誠一編『教育史』東洋経済新報社、1963 年）においても、「自由大学がほんらいもっていた教養主義的、人格主義的性格は、運動の大衆化をさまたげ、「一部の好学徒の研究・修養機関」たるにとどまらせる原因であり、それは労農階級の社会的解放に必要な武器としての理論を提供する民衆教育機関にはなりえなかった」とのべています。

この宮坂さんの、当時の社会教育の体制化に対抗する民衆の自主的な成人教育運動として自由大学運動を位置づけつつも、教養主義の限界をまぬがれなかったとする見解は、その後の自由大学研究に定説的見解として大きな影響を与えていきました。

なお、この時期に自由大学運動を取りあげたものに、伊東正代「自由大学運動序説－民衆の教育要求とその組織化の論理－」(『社会問題研究』第 4 号、1967 年）があります。伊東さんの論文は、民衆の学習要求が「どのような状況で発生し、どのように展開されたのか」を明らかにしようとしたものです。そのなかで、農村青年の学習要求を「内面的自我形成の要求」とし、それは青年たちの離農・離村が大きな社会不安として問題されはじめ、また「養蚕業をはじめとする農産物の商品化が進み、従って地域社会の資本主義

社会の進行によって、かつての農村共同体的意識が崩壊し、激動する社会の中で、孤立感からのがれるために自らの展望や個人的な「自我意識」が強烈に求めはじめられた」ことによる、と指摘しましたが、その実証はきわめて不十分なものに終わっています。

(3) 上木敏郎の土田杏村伝記研究

上木敏郎さんは、土田杏村の伝記的研究を進めるなかで、土田が理論的指導者として深く関わった自由大学運動についても関心を持ち、自身の個人雑誌『土田杏村とその時代』第 7・8 合併号（1968 年）を「自由大学運動」の特集号とし、自由大学関係者の回想を収録しています。また、土田の生い立ちから大正期までをまとめた「若き日の土田杏村(1)～(4)」（『成蹊論叢』第 6 ～ 8 号、第 10 号、1967 年～ 1971 年）の中で、地道な史料収集をもとに土田と各地の自由大学との関わりをあとづけています。

上木さんは、のちに『土田杏村と自由大学運動－教育者としての生涯と業績－』（誠文堂新光社、1982 年）を刊行され、土田の生涯を自由大学運動との関わりを中心にまとめられています。

３．1970年代の自由大学研究

(1) 多様な研究の活発化

自由大学運動に対する関心は、1970 年代にはいると、”大学紛争”を契機として大学のあり方が問われ、また住民運動のたかまりとともに社会教育のあり方が問われる中で急速にたかまり、それにともなって多様な研究が蓄積されるとともに、研究の前提となる史資料類も数多く公開され、研究の裾野が一気にひろがった時期でした。

松村憲一さんの「自主的成人活動としての「上田自由大学」運動とその限界－大正デモクラシー理念にもとづく民衆教育－」（早稲田大学社会科学研究所プレ・ファシズム研究部会編『日本のファシズム－形成期の研究－』早稲田大学出版部、1970 年）は、大正期における国家の国民教化政策との対

抗関係において自由大学運動をとらえ、「文部省（官製）による青年、成人教育施策が本格的に行政上のレベルで実施され、国民の思想善導への方向が明確に打ち出されて来たこの時期、それに対する民衆の自由の主張（プロテスト）」として自由大学を位置づけています。しかし同時に、土田杏村などの自由大学理念を分析する中で、宮坂さんと同様に自由大学運動の限界として教養主義を指摘しています。すなわち、「自由大学理念を形成し実践した発起人および講師」には「「日本の現実の生活的土壌や、実感的世界に根を下ろさない、いわゆる知識の断片でしかない教養を、インテリゲンチャの教養」として生活実感を含めたイデオロギーから超絶した次元における内省、人格自律を教育目的の究極とする方法論に過ぎない傾向を端的に指摘できる」とし、さらに聴講者のがわには、「その獲得した智識を如何に生活化し得たかの観点からこれを評価する」とき、その運動は「単なる学問への要求、向学心を満たすために自主的に講座を選択したと考えられる一面もある」と述べ、自由大学の啓蒙が聴講者にとって必ずしも現実変革の力となり得なかったのではないか、と主張しています。この松村さんの評価は、基本的には宮坂さんの見解を継承したものですが、国家の国民教化政策との対抗関係において自由大学運動をとらえようとしたところに、その特徴があります。

この国家の国民教化政策に対する民衆の自由の主張として自由大学運動を位置づける松村さんの自由大学理解を批判し、自由大学運動を大正デモクラシー状況に置ける文化との関連において位置づけようとしたのが、竹村民郎さんの『独占と兵器生産－リベラリズムの経済構造－』（勁草書房、1971年）でした。竹村さんは、「新しい世紀とともに、支配階級は階級同盟、階級の政治ブロック、すなわちブルジョア民主主義という新しい政策をとり始めた」（グラムシ）という条件下に、クローチェ的大知識人である吉野作造たちが地方の中小知識人の価値観を支配してゆく文化の組織と機能を論じ、自由大学運動を「階級闘争の視点を捨象させた抽象的な学問体系の受容を自己目的化するもの」としてとらえ、「自由大学の組織の拡大にのって、人道主義的世界観－民本主義は空気の如く県内外の中小知識人に浸透し」、「その結果として大衆はみがからを解放する道から実際には隔離され」た日本の現実の例証としました。

大槻宏樹さんの「自由大学運動における社会教育論」(『学術研究』第 19 号、1970 年）は、自由大学運動の中で展開された、当代社会教育体制批判、労働と教育との結合論、生涯教育論、人間教育論、社会の改造とプロレットカルト論、自由大学の組織と構想について検討したものです。大槻さんは、その中で、「学校教育中心の教育から、社会教育中心の教育体制への構想・展望の中にも、生き生きとした自由大学の息吹が感じられ」るにもかかわらず、「それらの主張が必ずしも結実をみたわけではなかった」のは、「教育と労働との結合を唱えながらも、生産活動を妨げない時間を利用した教育にとどまっているかぎりは、労働の中にその原理を導き出すことが不可能で」あり、「そこに自由大学運動自体がやがて教養主義に埋没していく問題が潜んでい」た、と述べ、宮坂・松村さんと同様に、教養主義の限界を指摘しました。大槻さんは、この論文の中で、自由大学年譜を作成し、各地の自由大学における講座一覧を明らかにしましたが、この年譜には史料操作の誤りとその後の史料発掘によって補正すべき個所がいくつか指摘できます。

自由大学研究が、宮坂さんによる本格的研究以来、運動の理論的支柱である土田杏村の自由大学理念ないしは教育思想の分析を中心としたものに終始していた一方で、この時期には、さきの大槻論文の自由大学年譜をはじめ、森山茂樹「魚沼・八海両自由大学の成立と経過－大正期自由大学運動研究への試み－」(東京都立大学『人文学報』第 82 号、1971 年)、上木敏郎「土田杏村と自由大学運動－信濃自由大学を中心に－」(『思想の科学』1972 年第 2 号)、山野「上田自由大学運動研究ノート」(『民衆史研究』第 10 号、1972 年)、山野「昭和初期の上田自由大学」(『自由大学研究』第 1 号、1973 年、のち「昭和恐慌と自由大学運動－上田自由大学を中心に－」と改題・加筆して『長野県近代史研究』第 6 号（1975 年）に再録)、山野「伊那自由大学の成立と経過」(同編『伊那自由大学関係書簡』(自由大学研究会、1973 年)、山野「伊那自由大学の歴史」(『月刊社会教育』1975 年 9 月号)、小川利夫「自由大学運動」(国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第 7 巻、1974 年、同『青年期教育の思想と構造』勁草書房、1978 年に再録）など、詳細な実証的研究が進められました。

森山論文は、それまでほとんど知られていなかった新潟県の自由大学運動

を発掘したものであり、上田自由大学を中心としていた自由大学研究に、新たな材料を提供するものでした。

上木論文は、土田杏村との関連においてですが、信濃自由大学（のち上田自由大学）の形成過程を中心に詳細な叙述を試みたものです。論文は、別稿「若き日の土田杏村（2)」(『成蹊論叢』第 7 号、1968 年）より自由大学運動に関する部分をまとめたものですが、信濃自由大学の成立を信濃黎明会修養部の発展とみる従来の理解を実証的に批判し、神川村における哲学講習会の開催の中から自由大学の構想が具体化していったことを明らかにしました。

山野論文のうち上田自由大学に関する論文は、上田自由大学の形成過程から 1921 年の発足、学習活動の展開、26 年の講座中断、28 年の再建、31 年の自然消滅までを、実証的に明らかにしたものです。上田自由大学についてはこれまで、上田市立図書館所蔵の『自由大学雑誌』『信濃自由大学の趣旨及内容』や猪坂直一『回想・枯れた二枝－信濃黎明会と上田自由大学－』上田市民懇話会、1967 年）などの史料に依拠して叙述されてきましたが、その叙述を塗り替える、新たな史実を明らかにしました。とくにタカクラ・テルが中心となった昭和恐慌期の状況を明らかにしたことは、自由大学研究に新たな視点を提供するものとなりました。また、伊那自由大学に関する論文は、実証的な研究が行われてこなかった伊那自由大学の歴史を、新たな史料発掘をもとに明らかにしたものでした。

小川論文は、国立教育研究所上田調査団による史料調査と最近の自由大学研究の成果を取り入れ、自由大学運動を概観したものですが、その中で、自由大学運動の時期区分を試みています。すなわち、前期を上田自由大学が正式に発足してから中断せざるをえなくなるまでの数年間（1921 年 11 月～ 26 年 3 月)、後期をその再建から終焉にいたるまでの数年間（1928 年 3 月～ 30 年 1 月）とし、前期と後期との間には相互に交錯する前期から後期への移行期があり、1924 年の自由大学協会の成立前後から上田自由大学が再建されるまでの数年間としています。そして「自由大学がその発足から中断、さらにその終焉にいたるまで一貫して背負っていた歴史的課題は、要するに自由大学における「自由」の原則的かつ実践的な認識とその具体化にかかわる問題であった」とし、この問題をめぐって 1924 年前後から自由大学運動の内

外において亀裂が生じてきたことをもって、前期と後期をわけるメルクマールとしました。この時期区分は、山野の研究成果に立脚したものですが、これまで時期区分すること自体考えられてこなかっただけに、自由大学理解に新たな視点を導入するものでした。

(2) 「ツチダ自由大学」から「タカクラ自由大学」へ

これまでの自由大学研究に共通してみられる方法は、理論的指導者であった土田杏村の自由大学理念や教育思想を分析し、そこから自由大学運動の評価をするという方法でした。このような土田の視点からのみの研究方法を批判し、自由大学の遺産を今日に生かしていくための立場から、”実践”への視点を自由大学運動の中にさぐりあてていくことを主張したのが、小林利通さんの「幻想としての自由大学－解釈のためでなく、変革のために－」(『自由大学研究』第 1 号、1973 年）でした。小林さんは、土田「杏村の思索や行動の軌跡を逐い、自由大学運動をその角度からのみ切りとって考察するとすれば、運動のダイナミズムは欠落してしまう」と、これまでの研究方法を批判し、上田自由大学については、「1921 年秋の建学の精神－教祖とその弟子たち［注、土田杏村と猪坂直一たち－引用者］－のみに設定した視座ではなく、発展し変貌してゆく全体の流れとして運動をとらえ」ること、「端的に言えば、ツチダ自由大学として今日はいささか観光的にすらなっている伝承をタカクラ自由大学という視点で再構成してみること」を提起したのです。(なお、小林さんの没後、『日本近代史の地下水脈をさぐる－信州・上田自由大学への系譜－』梨の木舎、2000 年が刊行されています。)

この小林さんの提起をうけ、自由大学運動の歴史を再構成し素描したのが、山野の「自由大学運動と国民の学習権」(『民衆史研究会会報』第 2 号、1974 年）です。山野は、大正期の自由大学運動が「学習と実践とが分離したいわゆる教養主義の傾向を回避すること」ができず、「土田杏村の構想した自由大学の理念も、運動が全国に拡大してゆくにともなって、矛盾を露呈し」、1924 年前後から自由大学運動に”亀裂”が生じたこと、ついで昭和恐慌期には自由大学運動が社会運動とも結びつき、伊那自由大学千代村支部の動きを例に、地域変革と結びついた学習運動の展開を構想していったことを明ら

かにしました。そして、自由大学運動は「民衆自身の知的欲求の向上と自己成長のための学習運動」から「地域変革のための学習運動」へと発展していった民衆教育運動であると評価しました。そのことをより詳細に論じたものに、山野「自由大学運動の生成とその展開」（碓井正久編『日本社会教育発達史』［講座現代社会教育Ⅱ］亜紀書房、1980 年）などがあります。

(3) 教養主義をめぐる問題

自由大学運動が当時の社会教育の体制化に対抗する民衆の自主的な学習運動であった点に大きな意義を認めつつも、教養主義の限界をまぬがれなかったとする見解は、宮坂広作さんにはじまり、松村憲一、大槻宏樹さんらによって受けつがれてきました。これに対して山野は、大正期の自由大学運動は教養主義の傾向を濃くしていったが、昭和恐慌期には教養主義を克服しいゆく動きがみられ、地域変革と結びついた学習運動の展開が構想されていった事実を明らかにし、問題を動的にとらえることを主張しました。

一方、佐藤忠男さんは、「土田杏村と自由大学」（『朝日新聞』1973 年 8 月 6 日付朝刊、思想史を歩く欄、のち朝日新聞社編『思想史を歩く』下巻、朝日新聞社、1974 年に収録）の中で、「教養主義は、権威ある教養と引き換えに社会的な地位を保証してやるというような学歴制度と結びついているかぎり、まことにいやらしいものであると言わざるを得ない。しかし土田杏村がそこでめざしたのは、学歴制度などによって民衆の知性が他律的につくりあげられてゆくことに対抗して、民衆が真に自律的な知性を持つようになることを助けることであった。すでに志が違えば、形は同じような教養主義でも実質は違う、と言わなければならない」と述べ、自由大学の限界として批判されてきた教養主義について積極的な意義をあたえました。

また、この佐藤さんの見解を継承し、小林利通さんが「ツチダ自由大学」を教養主義として批判したことに対して疑義をとなえ、教養主義に積極的な意義をあたえようとしたのが、黒沢惟昭さんでした。黒沢さんは、「自由大学研究の現段階」（『月刊社会教育』1973 年 11 月号、のち「上田自由大学と若干の問題点」と改題して、同『社会教育論序説』八千代出版、1981 年に収録）の中で、「教養主義」の内容が問われなければならないとし、「地位

の向上と結びついた権威的な教養は拒否されるべきであるが、民衆が与えられた「教養」を批判するために自ら求める教養は同じ教養でもその意味はまるで異なったものになろう」と述べています。それは、民衆にとっての教養の意味を積極的に評価する立場から、自由大学における教養の重視は限界とするにあたらないとしたのです。

さらに別の論稿「自由大学研究についての覚書－教養概念をめぐって－」（『一橋論叢』第 71 巻第 5 号、1974 年、同『社会教育論序説』八千代出版、1981 年に収録）において、この教養主義をめぐる問題により詳細な検討をくわえ、「当時の講義の実態から推測すれば、恐らくそれは、なんらかの点で聴講者の「生活」ときり結んでいたように思えてならない」のみならず、土田杏村の思想に人間変革と社会変革を統一してゆく「発想が全くみられないとする宮坂説には疑点が残る」とし、「自由大学運動は、「教養主義」（「非実践性）という批判にもかかわらず逆に、きわめて実践的であった、少なくとも、そうである可能性をはらむものであった」と、結論づけています。　黒沢さんは、従来の研究が教養主義に陥込んでいく原因の究明に傾斜し、その原因として「聴講者の生活現実（労働）と講義内容が遊離していた点」をあげているが、「いずれの論者も、遊離の内容、要因については直接に説明をなしえておらず」、土田杏村の「思想からいわば演繹的に「教養主義」埋没の必然性を説明するという手法をとっている」と批判しています。この指摘は正当ですが、しかし黒沢さんの場合にも、自由大学の講義が聴講者の「生活」ときり結んでいたという指摘にもかかわらず、その実証はきわめて弱いものでした。この段階では、自由大学での学習が聴講者にどのような影響を与え、地域にどうかかわっていったのかを明らかにするまでにはなっていませんでした。

(4) 新潟県の自由大学運動をめぐる問題

新潟県の自由大学運動については、森山茂樹さんが「魚沼・八海両自由大学の成立と経過－大正期自由大学運動研究への試み－」（東京都立大学『人文学報』第 82 号、1971 年）において本格的な研究が行われ、山野「新潟県における自由大学運動(1)(2)」(『自由大学研究』第 3 号、1975 年、第 4 号、1976

年）では、魚沼自由大学について、運営者たちの分裂が起こり、夏季大学時代からの商工業に従事する響倶楽部の青年たちが手を引き、1924 年秋以降は教員の学習運動としての性格を強くしていったこと、23 年から 26 年までの 4 年間、堀之内村当局から毎年 100 円の補助金を受けており、他から金銭的援助を受けないことを原則としていた自由大学の立場からの逸脱がみられたことを明らかにしました。

これに対して独自に史料調査を進めていた佐藤泰治さんは、渡辺泰亮宛の書簡類や「新潟毎日新聞」「北越新報」などの新聞記事、林広策が保存していた魚沼自由大学関係文書などを収録した資料集、小出町教育委員会編『八海（魚沼）自由大学書簡集』（小出町文化財調査資料第1輯、1977 年。同編『小出町歴史資料集』第 1 集［近代教育編Ⅱ］、1981 年に改訂再録）を刊行するとともに、「魚沼・八海自由大学発祥の考察」（『魚沼文化』第 11 号、1978 年）や「本県自由大学運動の研究」（『新潟県史研究』第 7 号、1980 年）、「越後の自由大学をめぐる二・三の問題」（『自由大学研究』第 6 号、1979 年）において、新潟県の自由大学運動について、検討しています。佐藤さんは、その中で、「聴講者自らが精々若干の物質的持ち出し持出しも敢えてやった」という意味での「自主的な学習機関」ではあったが、講義内容も「娯楽的要素を加味」するなど「越後的手直し」がなされている、ときわめて低い評価をされました。堀之内村当局から補助金を受け取っていたことについても、山野が「地域において自由大学が一定程度の”市民権”をえていたことを示すもの」と評価したことに対しても、佐藤さんは、本来的には反官製でなければならない自由大学が、魚沼自由大学の場合には、その性格が無原則的で曖昧であり、したがって村当局も自由大学と官製講習会を同類視していたがゆえに補助金を出したのであり、補助金の支出は、自由大学の「本質的展開と遠いが故の歓迎と考えるべきで、「自由大学」そのものとしては市民権は得られなかったと考えるべきではないか」と批判しました。この佐藤さんの批判に対し山野は、「魚沼自由大学の性格－佐藤泰治氏の批判に答えて－」（『自由大学研究』第 6 号、1979 年）で、「魚沼自由大学を官製講習会のなかに埋没していったものとみるよりは、一定の思想的影響を地域民衆に与えた学習運動であった」とし、ただ「自由大学が地域に浸透していった証

拠を、補助金の支出にみるのは一面的であり、魚沼自由大学の歴史の全体から評価すべきで」、今後の研究課題としました。

一方、安達朋子さんは、「新潟県における自由大学運動（上）（下）」（『自由大学研究』第 8 号、1983 年、第 9 号、1986 年）で、「補助金の支出を反官に欠ける要素として捉え、自由大学の没個性ぶりを表しているとみるのはどうであろうか」と、佐藤さんの評価を批判し、「村当局が自由大学に好意的であった」ことを明らかにし、受講者へのアンケート調査などをもとに、「封建色の濃い魚沼の地に、新しい教育の風を送りこみ、たとえ微力ではあれ、性別、職業に関係なく聴講した人々の胸の中で、細く長く生き続けている」点に、自由大学が果たした役割を評価しています。

なお、佐藤さんは、「川口自由大学序論」（川口町歴史民俗研究同好会『会誌』第 2 号、1980 年）において、これまで知られていなかった川口自由大学について検討しています。

(5) 伊那自由大学をめぐる問題

伊那自由大学については、宮坂広作さんが『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968 年）において検討したのが最初になります。その中で宮坂さんは、伊那自由大学も基本的には土田杏村の思想的な立場に一応はかかわっていて、教養主義の結果をまぬがれなかったが、現実には下伊那地方の青年運動、とくに自由青年連盟等の青年運動の上に立脚しなければならなかった限りにおいて、実践的な性格をおびざるをえなかったとし、「各地にできた自由大学の中でも、最も実践的な性格をもっていた」と評価しました。

この実践的な性格をもっているという宮坂さんの指摘に対して、基本的には土田杏村の自由大学構想を継承しているという立場に立ち、自由青年連盟等の社会主義青年運動の側からは「反動的教育運動として批判されてきた」とするもので、松村憲一さんの「自主的成人活動としての「上田自由大学」運動とその限界－大正デモクラシー理念にもとづく民衆教育－」（早稲田大学社会科学研究所プレ・ファシズム研究部会編『日本のファシズム－形成期の研究－』早稲田大学出版部、1970 年）、上木敏郎さんの「解題　土田杏村

と自由大学」（『教育労働研究』第 1 号、1973 年）、中野光さんの「教育の自由と解放を求めて」（金原左門編『自由と反動の潮流』日本民衆の歴史第 7 巻、三省堂、1974 年）などがそれです。たとえば上木さんは、「この地の自由大学は、自由青年連盟を脱退した横田憲治や平沢桂二らを中心に結成されたものであったため、一部の急進的な青年たちからは、しばしば「反動教育運動」などと罵倒されていた」と述べています。

これに対し山野は、『伊那自由大学関係書簡』（自由大学研究会、1973 年）や「伊那自由大学の歴史」（『月刊社会教育』1975 年 9 月号）の中で、土田杏村と伊那自由大学発起者との関係について、土田の自由大学構想と発起者の見解との間にはくい違いがあったこと、横田憲治・平沢桂二はＬＹＬを脱退したのちに伊那自由大学を設立したが、地域の青年運動や社会主義運動と結びつきながら学習運動を展開したこと、昭和恐慌期の千代村支部の動きの中には、「地域変革のための学習運動という側面を強めていった」ことを明らかにし、伊那自由大学の動きを積極的に評価しました。同様の指摘は、小林千枝子「伊那自由大学について」（『自由大学研究』第 5 号、1978 年）にもみられます。

一方、佐々木敏二さんは、下伊那郡の社会主義運動を詳細にあとづけた労作『長野県下伊那社会主義運動史』（信州白樺社、1978 年）において、伊那自由大学についてふれ、「伊那自由大学は創立当初はプロレットカルトを標榜した」が、1924 年の「ＬＹＬ検挙事件から、右旋回をはじめ、プロレットカルトの姿勢を次第に失い、少人数の学習会へと変質していった」とし、千代村支部の動きについても「これはもはや当初の自由大学ではなくて、かつての村青の特別講座を代行する性格のものである」と積極的な評価はされていません。のちに佐々木さんは、「長野県における社会運動と自由大学運動」（『自由大学研究』第 7 号、1982 年）において、従来の自由大学研究が、社会教育学の枠組みの中で土田杏村の「理念がどう具体化されたのかという理念中心の研究」が中心で、自由大学の受講者がどのような社会構成であり、また聴講者たちがその地域にどういう影響を与えたのかという面での研究が遅れていることを指摘されたうえで、下伊那の場合、自由大学の創設者である横田、平沢、須山賢逸の 3 人と自由大学連盟・ＬＹＬとの関係、創設者と

土田との見解の違い、あるいは創設者相互間の違い、ＬＹＬ検挙事件後の伊那自由大学パンフレットの評価、千代村支部の活動の評価などを検討すること、自由大学と社会運動・青年運動との関連について研究を深める必要があることを指摘されました。

(6) 土田杏村の自由大学理念・教育思想

自由大学運動の理論的指導者である土田杏村の自由大学理念・教育思想については、宮坂広作さんの『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968 年）、大槻宏樹さんの「自由大学運動における社会教育論」（『学術研究』第 19 号、1970 年）で検討されてきました。のちに大槻さんは、「戦前自己教育論の思想構造」（同編『自己教育論の系譜と構造－近代日本社会教育史－』早稲田大学出版部、1981 年）において、戦前の自己教育論を「公民型」「社会教育施設型」「社会化型」「共同社会型」の 4 つに類型化し、それぞれのタイプに属する人物の自己教育論について検討していますが、とくに「共同社会型自己教育論」として土田杏村の自己教育論を取りあげ、「杏村の自己教育は、自己教育の共同化であり、近代公教育を超克するものであり、現代自己教育論の種々相は、杏村の自己教育論の復権として位置づけられよう」と、その思想を積極的に評価しています。

その後、石津靖大さんが、「土田杏村のプロレットカルト論」（『女子聖学院短期大学紀要』第 8 号、1976 年、第 9 号、1977 年）で土田のプロレットカルト論を検討し、従来自由大学の限界として指摘されていた教養主義について、「教養主義の形式よりもその時点における教養主義の意義役割という実質を問わなければならない」とし、土田の教養主義は学歴主義の教養主義に対して民衆の自律形成をめざしたものと評価しています。

また、稲葉宏雄さんは、「大正デモクラシーと中等教員の増大」（中内敏夫・川合章編『日本の教師 2 －中・高教師のあゆみ－』明治図書、1970 年）の中で自由大学についてふれ、土田の教育思想を分析したうえで、「自由大学は民衆自身の自己成長、自己改善のために営まれる民衆教育機関であり、その経営、カリキュラム構成、教師の選択等、自らの教育に関する一切のことが民衆自身の主体的意志決定においてなされ」たのであり、「自由大

学運動の背景には、現在の学校体系が巨額の教育費を使用しながら民衆の知的水準の向上を結果せず、労働と教育の結合は阻害され、教育がブルジョア的教権によって支配されることによって、無産者精神が抑圧されていることへのきびしい批判が貫かれていた」と高く評価しました。そして、土田にとって、自由大学運動はプロレットカルト運動の一環をなすものとして意識されており、プロレットカルト論の観点から自由大学運動を検討することが、自由大学運動を評価する際に重要な視点を提供するものと考えられるとし、土田の教育思想を検討したのが、稲葉宏雄「土田杏村の教育思想と自由大学運動」（池田進・本山幸彦編『大正の教育』第一法規、1978 年）です。稲葉さんは、その中で、土田は「学校概念の革命」が必要であるとして、学校体系を成人教育を中心として再編成しようとしたが、その成人教育の具体的実践が自由大学運動に外ならなかったこと、自由大学運動は「生涯を通じての労働と結合した、そして教育における地方主義・自治主義を実現する意図を持った教育運動」であること、しかも「国家が行う民衆教化としての公民教育というブルジョアカルトをきっぱり拒否するものであり、教育内容、方法、講師の選択等、その教育活動の一切が民衆の自己教育への意志によって決定されるという性格をもつべきものであった」こと、教育は一切の教権から独立すべきであって、教育と宣伝とを区別し、「イデオロギー批判の自らの武器を鍛えあげることによって、自らのよって立つ思想的根拠を確立しようとするものであった」ことなどを指摘しました。

米山光儀さんは、「土田杏村の生涯教育論構想」（『日本生涯教育学会年報』第 3 号、1982 年）において、土田の自由大学論とプロレットカルト論を中心に検討し、土田の自由大学論の特色として、(1)「自己教育という教育理論を基底にすえた生涯教育を考えた」こと、(2)「教育と労働との結合」を説いたこと、(3)「教育と宣伝の区別にあらわれている教育の自律性」を主張したことを指摘し、また、プロレットカルト論において、ブルジョアカルトを批判するとともに、現実の教育体制を批判し、生涯にわたる新しい教育制度を構想したもので、それは「学校改革を含めた徹底した生涯教育の構想であった」ことを明らかにしています。

(7) 自由大学運動に関わった人たちへの関心

1970 年代の自由大学運動への関心の高まりは、土田杏村以外の講師の人たちへの関心へとひろがり、恒藤恭や山本宣治、タカクラ・テル、今中次麿が自由大学運動にどのように関わったのかという検討が行われるようになりました。

山崎時彦さんは、「上田（信濃）自由大学－その開始」（『法学雑誌』第 23 巻第 4 号、1977 年）において、上田自由大学の第 1 期第 1 回講座の講師となった恒藤恭の「法律哲学」の講義の状況や聴講者との交流を詳細にあとづけています。また、上木敏郎さんは、「土田杏村と恒藤恭」（『信州白樺』第 29 号、1978 年）の中で、土田杏村と恒藤恭の交流をあとづけ、恒藤の自由大学との関わりについても詳しくふれています。

山野「山本宣治と自由大学運動」（『信州白樺』第 30 号、1978 年）は、山本宣治が魚沼自由大学や伊那自由大学に出講したときの講義内容や状況、自由大学連盟案の提案などを明らかにし、山宣にとって自由大学運動への関わりは労働者教育運動などさまざまな教育活動への関わりの出発点を意味することを指摘しました。また、上木敏郎さんの「土田杏村と山本宣治」（『成蹊論叢』第 16 号、1977 年）は、13 通の往復書簡を中心に 2 人の交流の足跡とその時代背景を探ったものですが、その中で自由大学運動との関わりが詳しく叙述されています。

山野「タカクラ・テルと自由大学運動」（自由大学研究会第 7 回夏季研究例会、1979 年 9 月、日本社会教育学会第 26 回研究大会、1979 年 10 月）は、講師の中で最も出講回数が多く、人気講師となったタカクラ・テルの自由大学運動との関わりを明らかにしたもので、タカクラは、自由大学を通して地域の青年たちと結びつき、農民運動や青年団運動と関わる中で思想変革をとげていったことを指摘しました。

前野良さんの『上田自由大学と今中次麿博士の政治学』（私家版、1983 年）は、上田、群馬、魚沼の各自由大学に出講した今中次麿の講義内容や今中政治学の概要を述べられたものですが、その中で魚沼自由大学での「政治学」の講義案草稿「現代政治学上の数問題」が史料紹介されています。

(8) 上田自由大学の再構成

多彩な自由大学研究が進められる中で、最も研究が多い上田自由大学についても、新たな自由大学像が提示されました。

山野は、「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動－上田自由大学を中心として－」(『季刊現代史』第 8 号、1976 年）において、ほぼ 10 年にわたって学習運動を展開した上田自由大学について、大きく 2 期に分けて、それぞれの時期の特徴を明らかにしています。すなわち、第 1 期は 1921 年に発足してから 26 年に中断せざるをえなくなるまでの数年間で、土田杏村の大きな影響のもとに地域民衆の「知的欲求の向上と自己成長のための学習運動としての側面がつよかった」時期で、第 2 期は 1928 年に再建されてから 31 年に消滅するまでの数年間で、タカクラ・テルの協力のもとに農民運動と結びつきつつ講座を組織し、「地域変革のための学習運動としての側面をつよめていった」時期であった、と指摘しました。

これに対し上条宏之さんは、「大正デモクラシーと上田自由大学」(『伝統と現代』第 56 号、1979 年、のち同『民衆的近代の軌跡－地域民衆史ノート 2－』銀河書房、1981 年に再録）において、山野の指摘する昭和恐慌期の「地域変革のための学習運動」段階に形成した文化の前衛性を評価しつつも、「その地域変革学習は治安維持法成立をへた昭和恐慌期特有の非合法性を余儀なくされて、その影響力をきわめてそがれてしまっている」ことを指摘し、上田・小県地域の金井正・山越脩蔵による神川村の生産力調査、農民美術や自由画教育運動、信濃黎明会の普選運動、自由大学の形成など青年たちの動きを検討されたうえで、「大正デモクラシー期特有の農民による地域変革運動とのかかわりにおいてすすめられた学習運動と見る」ことができ、「上田自由大学のもつ限界と指摘される地域青年の教養主義・人格主義が、それほど否定的にみられなければならないものなのかどうか、疑問を禁じえない」としています。それは、地域民衆の主体的な営為にそって、その創造性を評価しようとするもので、「教養主義的限界説」に対する新たな問題提起でした。

(9) 通史等への自由大学運動の登場

自由大学運動については自主的な成人教育活動として注目されたことや社会教育の側から研究が進められてきたこともあり、社会教育の通史等への記載は比較的早くから見られました。1970 年代からの自由大学研究の進展により、教育史や社会教育の概論や歴史などでも、研究成果をふまえた叙述がなされるようになりました。たとえば、小川利夫「自由大学運動」（国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第 7 巻、1974 年）、藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』（学苑社、1979 年）、吉沢潤『社会教育概論』増補版（国土社、1979 年）、島田修一・藤岡貞彦編『社会教育概論』（青木書店、1982 年）、川合章・安川寿之輔・森川輝紀・川口幸広『日本現代教育史』（新日本出版社、1984 年）、藤田秀雄・大串隆吉『日本社会教育史』（エイデル研究所、1984 年）などが、それです。

また、日本近代史の側からも大正デモクラシー運動の1つとして注目されるようになり、通史や講座等で自由大学運動が取りあげられるようになりました。たとえば、中野光「教育の自由と解放を求めて」（金原左門編『自由と反動の潮流』日本民衆の歴史第 7 巻、三省堂、1975 年）、鹿野政直「大正デモクラシーの思想と文化」（岩波講座『日本歴史　近代 5』第 18 巻、岩波書店、1975 年）、鹿野政直『大正デモクラシー』（日本の歴史第 27 巻、小学館、1976 年）、山野「教育県長野－上田自由大学とその周辺－」（金原左門編『地方デモクラシーと戦争』地方文化の日本史第 9 巻、文一総合出版、1978 年）、金原左門『昭和への胎動』（昭和の歴史第 1 巻、小学館、1983 年）、山野・成田龍一「民衆文化とナショナリズム」（『講座日本歴史』第 9 巻・近代 3、東京大学出版会、1985 年）などをあげることができます。

（10）高校日本史教科書への記載

このような 1970 年代の自由大学研究の成果は、80 年代以降になると高校日本史の教科書にも反映されるようになり、自由大学運動が記載されるようになりました。『日本史』（改訂版、三省堂、1984 年文部省改定検定済）が初出で、その後、『明解日本史Ａ』（三省堂、1994 年文部省検定済）、『高校日本史Ｂ』（新訂版、実教出版、1998 年文部省検定済）、『日本史Ａ』（東京書籍、2007 年文部科学省検定済）で記載されています。とくに実教出版の

『高校日本史Ｂ』では、「大正期の文化はどのようなものか」という単元で「自由大学運動」をとりあげ、タカクラ・テルの上田自由大学での講義風景の写真とともに11行にわたる説明がなされています。

４．1980年代以降の自由大学研究

(1) 自由大学運動60周年記念集会（1981.10.31 ～ 11.1、上田市）

自由大学研究会が主催して開催された記念集会は、1つは、当時の自由大学関係者から出来るだけ具体的に、自由大学運動とは何であったのか、その体験談を語ってもらうことにより、自由大学運動の歴史について、相互の共通理解を深めあう機会にしたいということと、もう1つは、集会のメイン・テーマを「自由大学運動と現代」としたように、自由大学運動と現代との関わりを問うことを意図してもたれたものでした。そこには、自由大学運動における”自由”の問題が、たんに過去の問題ではなく、いま再び実践的課題になっているという認識がありました。教科書問題に象徴的に示されているように、国家による教育への介入があらわになっている現在、大正デモクラシーの時期に教育の自由を地域民衆の手にとりもどそうとした自由大学運動の歴史に学ぶことは、すぐれて今日的な意味をもつものと考えたのでした。

集会の第1日目は、山野が「自由大学運動の歴史とその意義」について講演したあと、タカクラ・テル氏をはじめ自由大学の講師や受講者を囲み、当時の懐旧談に、参加者たちは熱心に耳を傾けました。その中でも、90歳という高齢にもかかわらず病躯をおして出席されたタカクラ氏は、「私は、自由大学から頼まれて教える役割をしたのですが、実際は自由大学から教わったんです。とくに会員である農民・労働者の人たちから非常に大きな影響をうけました。私のものの見方、人生観というものが、根本的に変わりました」と、その後の人生を決定したのがこの自由大学であった、と落ち着いた口調で語りました。また、伊那自由大学の受講者であった佐々木忠綱氏は、戦時下の村長を経験しましたが、出征兵士に「絶対死ぬな、生きて帰って来いよ」とよびかけ、満蒙開拓の分村を拒否し続けることができたのは、この

自由大学で学んだためだと語りました。こうした自由大学関係者の証言は、参加者に深い感銘を与えたのでした。

第2日目は、記念講演会として4本の講演が行われました。

上木敏郎さんは、「土田杏村と自由大学運動」と題して、自由大学運動の中心的指導者であった土田杏村の生涯をあとづけながら、講師としてだけでなく、理論の構築、組織づくり、講師の斡旋など、土田が自由大学運動で果たした役割の大きさを指摘しました。

上条宏之さんは、「自由民権から自由大学へ」と題して、自由大学運動を自由民権期以降の民衆の自発的な運動の系譜の中に位置づけ、この運動が近代日本の歴史の中で、とくに教育・文化の面で重要な問題提起をした運動であることを指摘しました。

中野光さんは、「大正自由教育と自由大学運動」をテーマに、大正デモクラシー期には教育をめぐる「自由」の論議が沸騰したが、その中で土田杏村は「理性的に自己決定できる能力を身につける」という意味での「自由」を追求してきたとし、戦後 36 年を経た今日、自由を感性の段階でとらえる状況を克服し得ているかと問い、土田の「自由」の理解は、教育の現場で上からの統制が強化されている今日、改めて検討される必要があるとしました。

小川利夫さんは、「自由大学運動と現代社会教育の展望」と題して講演し、社会教育の立場から、自由大学運動の遺産に学び、今日に継承すべき点を明らかにしました。小川さんは、講演の中で、自由大学の基本理念は、今日、多くの地域における住民の運動の出発点になりうるとし、社会教育法第 3 条のいわゆる「国民の学習権」規定が空文化され抹殺されようとしている今日、自由大学運動にみられる受講資格の撤廃、男女平等の教育、学習教育内容の自主編成などの原則や、現在よりも厳しい条件のもとで持続性をもって学習しようとした点などは、注目すべき経験であり、それを社会教育の場で、ことに公民館で実践することは簡単なことではないが、今後の社会教育の発展の1つの方向を示唆するものであることを指摘しました。

このように 4 本の講演は、総じて教育の自由の今日的意味を問うものとなり、それぞれ示唆に富む内容のものでした。

この記念集会の記録は、のちに自由大学研究会編『自由大学運動と現代』

（自由大学運動 60 周年記念集会報告集、信州白樺社、1983 年）としてまとめられましたが、それは 1970 年代の自由大学研究の蓄積を集大成するものでもあったと考えています。

なお、1982 年 10 月 9 日と 10 日には、飯田市立飯田図書館が中心となり、飯田歴史大学・自由大学研究会の共催で「伊那自由大学運動 60 周年記念集会」が飯田図書館で開催されています。

(2) 〈農村青年〉・受講者への着目

1970 年代の自由大学研究は、土田杏村という知識人を中心とした民衆に対する啓蒙運動という図式による自由大学理解を克服し、地域民衆の自己教育運動として自由大学をとらえる視座構造が確立されていきましたが、80 年代から 90 年代になると、若い世代の研究者が中心となり、自由大学を創出していく〈農村青年〉や自由大学を受講した人々、あるいは地域民衆と知識人との関係性に着目する研究が進められていくようになります。また、金井正・山越脩蔵の文章や諸資料を収録した資料集（大槻宏樹編『金井正選集－大正デモクラシー・ファシズム・戦後民主主義の証言－』大槻ゼミ報告書「社会教育の研究」特別号、早稲田大学教育学部大槻研究室、1983 年、大槻宏樹編『山越脩蔵選集－共生・経世・文化の世界－』前野書店、2002 年）も刊行され、研究の幅をひろげていくことになりました。

柳沢昌一さんは、「信濃自由大学成立過程の再検討」（『社会教育の研究』（早稲田大学教育学部社会教育専修大槻宏樹ゼミ報告書、第 8 号、1980 年）において、自由大学の構想は、神川村での金井正・山越脩蔵らによる多彩な運動を背景に、直接的には哲学講習会の成功をふまえて、山越が構想したものであり、金井・山越らの運動に深い共感と期待をいだいていた土田杏村の協力を得て、その実現にいたったことを明らかにし、「自由大学運動と〈自己教育〉の思想－〈農村青年〉の自己形成史－」（大槻宏樹編『自己教育論の系譜と構造－近代日本社会教育史－』早稲田大学出版部、1981 年）では、神川村における金井正の明治から大正期までの自己形成史を軸に、自由大学を創出するにいたるまでの〈農村青年〉たちの思想と行動を明らかにすることにより、かれらの〈主体性〉の文脈から自由大学の成立をとらえよ

うとするものでした。

また、柳沢さんは、「「自由大学の理念」の形成とその意義－民衆の自己教育運動における〈相互主体性〉の意識化－」（『東京大学教育学部紀要』第 23 巻、1984 年）において、自由大学運動の動向が土田杏村にどのような影響を与え、土田がそれをどのように思想化していったかという観点から、土田の「自由大学の理念」の形成過程を検討し、自由大学が土田の教育論を育てたことを指摘しています。また、「民衆の自己教育運動における知識人と民衆の関連性－自由大学運動の成立をめぐって－」（『日本教育史研究』第 3 号、1984 年）や「自由大学運動における自己教育思想の形成過程」（社会教育基礎理論研究会編『叢書生涯学習－自己教育の思想史』雄松堂、1987 年）では、宮坂広作さんが指摘した教養主義的限界説をのりこえようとする研究に着目して、それまでの研究史を総括したうえで、土田杏村と自由大学運動をになった〈農村青年〉との相互の関係性を明らかにしています。そして、柳沢さんは、「国家的権威のもと、専門家から民衆へと一方的な伝達の回路と化し、自発性を〈領導〉する装置と化した教育の否定の上に立って、民衆自らが主体性に基づく自己教育運動による、下からの「自由連合」によって働く民衆の〈教育⇄自己教育〉の可能性を切り開こうとした」ことを「自由大学の理念」として積極的に評価し、そのうえで、この「自由大学の理念」そのものが土田という「知識人」と金井正・山越脩蔵ら〈農村青年〉との相互主体的な交流の中から産み出されてきたものであることを明らかにしています。

一方、60 周年記念集会での受講者の証言に触発され、これまでの研究が土田杏村や猪坂直一ら運動のリーダーに着目したものが多かったのに対し、受講者に着目する研究が進められていくようになったのもこの時期の特徴でした。

大槻宏樹さんは、「自由大学運動－自己と他者の関係性－」（『歴史公論』第 83 号、1982 年）の中で、自由大学を支えた農村青年と民衆に開かれた知識人との関係性をタカクラ・テルを例に明らかにするとともに、上田の金井正が若い頃から戦争や軍備に批判的な眼をもち、戦時下に村長となり苦悩した生涯や、下伊那の佐々木忠綱が自由大学から学んだこととして、戦時下に

村長となったとき、満蒙開拓の分村移民を拒否し、出征兵士に「絶対死ぬなよ」という言葉を送ったところに、自由大学運動の「芯」がある、と指摘しました。

米山光儀さんは、「自由大学の影響に関する一考察－長野県下伊那郡大下条村の場合－」（『慶應義塾大学教職課程センター年報』第 2 号、1987 年）において、伊那自由大学の熱心な受講者であった佐々木忠綱に着目して、自由大学で学んだことがどのような影響を与えたのかを考察し、大下条村の村長となった佐々木が、満蒙開拓の分村移民を拒否しただけでなく、教育や医療が社会では基本的で重要なことと考え、とくに村に中等学校や病院、国民健康保険組合を設立することに努力したことなどを明らかにしました（戦後、阿南高校、阿南病院として実現）。それは、自由大学が生み出した 1 つの人間像を提示するものでした。また、大日方悦夫さんは、「「満州」分村移民を拒否した村長」（『歴史地理教育』第 508 号、1993 年、のち歴史教育者協議会編『語りつぐ戦中・戦後 1　近衛兵反乱セリ』労働旬報社、1995 年に再録）で、「満州」移民と「分村」問題に焦点をあてて佐々木忠綱が分村拒否にいたる軌跡を明らかにしています。

上原民恵さんは、60 周年記念集会に参加したのがきっかけで、昭和恐慌期の上田自由大学を受講した深町広子に関心をいだき、広子の生涯を『深町広子と上田自由大学』（上田小県近現代史研究会、1995 年）にまとめています。上原さんは、この中で、広子がタカクラ・テルと出会い、自由大学に出席したことが、広子の生涯に一筋の道、農民文学の道を歩ませることになったと指摘しています。

渡辺典子さんは、従来の自由大学研究では上田自由大学で学んだ青年たちが地域で果たした役割を明らかにしていないとし、自由大学の存在意義を学んだ民衆の視点から問い直す必要があるとの課題意識から、「1920 ～ 30 年代における青年の地域活動－長野県神川村「路の会」による学習・教育を中心に－」（『日本教育史研究』第 13 号、1994 年）において、神川村の青年たちの集まり「路の会」の地域活動を検討し、「路の会」のメンバーは神川村の名望家層の息子たちを中心とし、その多くが青年団運動のリーダーであり、上田自由大学の運営者か受講者であったこと、「路の会」が発行した時報

『神川』は「村民に現状を直視させ、その認識にもとづく現状打開の方策を提唱」し、対外戦争や政府の恐慌対策の問題性を指摘して、「村の木鐸」としての役割を果たしていたこと、などを明らかにしています。

一方、山口和宏さんは、自由大学研究会の努力によって数多く集められた受講者の証言に着目し、「実際に自由大学を受講した人々にとって自由大学とは何であったのか？」が考察されないままになっているとし、受講者であった〈農村青年〉たちの声に耳を傾け、自由大学が実際に人々によって担われた意味、いわば「自由大学の生きられた意味」を明らかにして、自由大学運動の「限界」とされてきた「教養主義」を積極的な意義をもつものとして理解しようという意図のもとに、受講者の証言を検討しました。それが「自由大学運動における「教養主義」再考」(『日本社会教育学会紀要』第 30 号、1994 年）ですが、山口さんは、その中で、山野のように昭和恐慌期の自由大学に積極的な意義を見出す自由大学理解は、裏からいえば「教養主義の傾向を回避すること」が出来なかった大正期の自由大学にはそれほど意義を認めないということでもある、と疑問視したうえで、〈農村青年〉にとって最も重要であったのは地域変革よりも自分自身の人生観を確立することにあったと分析し、自由大学が受講生にとっても講師にとっても純粋に「学問」する場、「自我教育」の場として受けとめられ、「真理に飢えたる魂に対して健全なる糧を齎らす可き機関」「真の意味の大学」として実践されたことが、受講生であった〈農村青年〉たちの視野を広げ、「学問する喜び」と「学問の広さ」を知らしめて「本を読む」ようにさせるという〈成果〉をもたらしたとすれば、自由大学運動は前期・後期と時期区分してその「変化」を見るよりも、全体として「教養主義」であったことにこそ意義を見出すべきではないだろうか、と結論づけました。自由大学の教養主義をめぐっては、宮坂広作さんの教養主義的限界説以来、さまざまな議論がなされてきましたが、この山口論文は、土田杏村の視点からの分析ではなく、受講者の立場からの分析であり、自由大学の教養主義をめぐって新たな問題提起をしたものでした。

(3) タカクラ・テルの視角から

1980 年代に、タカクラ・テルが関わった自由大学運動を、地域変革との直接的な結びつきではなく、教育－自由大学の理念のうち「被教育者本位の教育」と「教育の自律性」－の視点から見直し、タカクラの営為の中に自由大学の未発の可能性をみ、自由大学を発展的に継承するための自由大学像＝「タカクラ自由大学」を構築しようしたのが、米山光儀さんでした。

米山さんは、「上田自由大学の理念と現実－タカクラ・テルの教育的営為－」（慶應義塾大学大学院『社会学研究科紀要』第 21 号、1981 年）、「自由大学の発展的継承とは何か－上田自由大学を素材として－」（『自由大学研究』第 8 号、1983 年）、「伊那自由大学とタカクラ・テル」（『慶應義塾大学教職課程センター年報』第 1 号、1986 年）、「タカクラ・テル」（渡辺弘編『「援助」教育の系譜』川島書店、1997 年）など一連の論文で、被教育者本位の組織であり、既存の大学とは異なる自由大学では、教育内容も既存の大学と異なっていなくてはならないはずであったが、実際には自由大学に出講した講師の多くは、既存の大学で培われた学問を講義しており、組織として新しい学問を構築するような取り組みをするまでにはいたらなかったこと、そのなかにあって、タカクラは、被教育者がもっている顕在的・潜在的な問題意識にもとづき、既存の大学で学んだ知識を再構築・再編成し、新しい学問を創造していったことを明らかにし、タカクラの教育実践にこそ、自由大学の理念を実現した、あるいは実現する可能性があったことを指摘しました。

なお、米山さんは、「タカクラ・テルの半生－大衆から学んだ知識人－」（山手英学院『紀要』第 12 号、1982 年）で、タカクラの生い立ちから転向した時期までの半生をまとめています。

５．２０００年代以降の自由大学研究

(1) 土田杏村の思想の再検討

自由大学研究は、2000 年代以降になると、70 年代から 80 年代にかけてのような高まりは去ったものの、土田杏村の思想を再検討する研究が進められてきました。

自由大学運動における教養主義の再評価をおこなった山口和宏さんは、「土田杏村における「教養」の問題－その思想的根底としての華厳の世界観について－」（『日本の教育史学』第 36 集、1993 年）において、土田杏村の「自己教育」の思想と「教養」観の根底には華厳の世界観があり、土田の求めた「教養」はきわめて実践的な性格のものであったが、そうした「教養」の形成を「民衆の自己教育」にまかせようとした「理念」そのものが、民衆にそうした「教養」の形成を実現させないというパラドキシカルな思想構造にあったことを明らかにされ、また、「土田杏村のユートピア」（上杉孝實・大庭宣尊編『社会教育の近代』松籟社、1996 年）において、土田の「自己教育」と「理想社会」の思想的関連性を検討しています。そして博士論文をもとに、土田の思想の全体構造と特色を解明した『土田杏村の近代－文化主義の見果てぬ夢－』（ぺりかん社、2004 年）を刊行しています。同書は、土田の評論活動がきわめて多方面にわたっているため、各学問分野で「それぞれ個別に論じられるのみであり、杏村思想の全体構造を明らかにした研究は一つも存在しない」という認識のもとにまとめられた労作ですが、自由大学運動については、第 4 章「教育運動の理論と実践」で取りあげられています。山口さんは、その中で、自由大学の構想について、自由大学運動は(1)「教育の機会均等」を保障し、知識の独占を排除して〈民衆へ開かれた学問〉を実現しようとするものであったこと、(2)「生涯に亘り永遠に自己教養の機会を持つ」という人間的権利を制度的に保障しようとする運動であったこと、(3)国家の教権から解放され「教育の自治」が保障された自由な教育活動を目指すものとされたこと、(4)自由大学とは「新らしい理想的の聯合体」であり「よき社会的規範」を示すことによって全社会に暗黙裡の影響を与え、しだいに全民衆を教化し、全民衆の社会を理想化する運動であったこと、を指摘したうえで、自由大学運動が失敗に終わらざるをえなかった原因の一つは、土田のかかげる相互主体的な自己教育の理念そのもののうちに胚胎していたことを指摘しています。たとえば、自由大学の講師の選択、教育の内容、教育の順序などの教育プログラムは「すべて講師と学ぶものとの協議」によって決定されることになっていたが、この土田のというところの「社会群団的」方法が実現するためには、学ぶ側にあらかじめ相応の知識が

なければならないはずであり、「杏村の自治的な自己教育論は、教育された結果をあらかじめ教育の前提とすることで成り立つという論点先取の議論になっており、論理的には成立しないパラドックスなのである」と指摘しています。山口さんは、自由大学が内包していた可能性とその限界の両面を検討し、自由大学運動が挫折していく必然性を土田の思想的文脈において論証したものであり、今後、自由大学を言及する場合には避けて通れない研究成果といえます。

土田の思想研究は、いま一人、古市将樹さんによって進められてきました。古市さんは、「土田杏村「社会教育学」に関する研究－人格の論理的成立が示される杏村の「社会」概念－」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』第 8 号－ 2、2001 年)、「土田杏村「社会教育学」に関する研究－「あるがまま」の社会概念とその提出の理由－」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』第 9 号－ 1、2002 年)」、「土田杏村の社会教育論にみる教育観の転換の構造」(『日本社会教育学会紀要』第 38 号、2002 年)、「土田杏村のプロレットカルト論に関する研究－教育観のパラダイム－」(『早稲田教育評論』第 17 巻第 1 号、2003 年)、「土田杏村の教育論および自由大学再考－学習／自己省察の契機としての他者－」(『関東教育学会紀要』第 35 号、2008 年)、「自由大学にみる「教育における他者」問題の実在概念としての他者」(早稲田大学自己教育研究会編『自己教育へのまなざし』成文堂、2010 年) と、土田杏村の社会教育論をその背景にある土田の思想との関係から分析する研究を中心に、「教育における他者」の問題を自由大学を事例に検討するなど、意欲的に研究を発表されています。

博士論文『土田杏村の社会教育学に関する研究－教育観の転換の構造－』(2001 年度) は、土田の文化主義・理想主義・人格主義およびプロレットカルトのそれぞれの関係を明らかにし、その総体としての土田の世界観を提示した労作ですが、その第 5 章で土田の社会教育学の成立過程およびその意義について論述しています。その中で、(1)従来の教育観においては教育を特別な領域としているが、土田は教育を人生や生活の一部として生涯に亘るものとして新たな教育観を提示したこと、(2)土田はポール夫妻のプロレットカルトを導入し、ブルジョアカルトを批判したが、エルガルトクラシー文

化を志向しない点でヨーロッパのプロレットカルトとは基本的に異なり、それは土田のプロレットカルトの基盤に、人格主義、文化主義、理想主義がおかれていたことによること、(3)土田は教育概念が社会概念なしには成立し得ないことを指摘し、「教育」は本来「社会教育」と呼ばれるべきであるとし、新たな教育観を提示したこと、(4)その教育は全生涯的であると同時にまた全生活的であること、また教育の自治を得ると同時に教育とそれ以外の生活の部面と緊密に結合すること、その方法は自学的、社会群団的であることや労働と結合すること、などを主張し、土田の社会教育学は、人間が人間らしく生きることの自己教育論を社会教育の中核に据えたものであること、しかも論理的帰結として論じているのではなく、自由大学運動を通した実践の裏づけをもった新たな教育観であったことを指摘したものでした。

なお、古市さんは、「信州にあった生涯学習の先駆けー自由大学運動の概要ー」(『愛知文教大学教職センター通信』第 1 号、2010 年）で、自由大学運動を概観したあと、自由大学研究の課題として、(1)受講者にとって、自由大学が幕を下ろさざるをえなかった事実が自由大学の継続と関係してどのように受けとめられていたのかの研究は進んでいないこと、(2)土田の「社会群団的方法」が実際にどのように有効であったのか・なかったのかを含め、土田らの試みに対する受け止め方を加えての自由大学の評価・分析が必要であること、(3)自由大学が開講していた約 10 年間のことに限らず、その後の時期を含め、自由大学運動が受講者の生き方や考え方にどのような影響を与えたのかを検討する必要があること、などを指摘しています。

(2) タカクラ・テルにとっての自由大学

2000 年代に入ると土田杏村と並ぶ自由大学運動の指導者となったタカクラ・テルについても、タカクラの評伝研究や、自由大学運動との関わりがその生涯にどのような影響を与えていったのかを検討する研究が出てきています。

山野は、タカクラの評伝研究を進める作業の一つとして、その幼年・少年時代から学生時代を経て長野県に移住し作家として出発するまでの半生を跡づけた「若き日のタカクラ・テルー作家への道ー」(桜華女学院高等学校

『研究紀要』第 4 号、2008 年）、1920 年代にタカクラがどのように「民衆」を発見し、独自の思想を形成していったのかを跡づけた「タカクラ・テルの 1920 年代－タカクラにおける「民衆」の発見－」（長野県近代史研究会編『長野県近代民衆史の諸問題』龍鳳書房、2008 年）を発表しています。山野は、後者の論文で、タカクラが自由大学に出講したのを契機に長野県に移住し、自由大学の農村青年たちや周辺の農民と結びつく中で、文壇からボイコットされ、作家として生きる糧を得ることさえ困難になったが、農村生活に根をおろし、深刻化する農村不況を目の当たりにして、有閑階級としてのインテリゲンチアからの断絶を表明するようになり、活動の重点を自由大学から農民運動に移していったこと、とともに、自由大学での講義内容も「文学論」から「日本民族史」へと変化させ、そこに「民衆」の発見があったこと、そして農民たちの願いや悲しみを受けとめ、ともに生きぬく中で、タカクラは自己変革をとげていったことを指摘しました。

また、「戦時下知識人の思想と行動－タカクラ・テルの場合－」（『法学新報』第 109 巻第 1・2 合併号、2002 年）は、タカクラが上田・小県地域の農民運動に参画し、1933 年の 2・4 事件で検挙され、「転向」したのちに行った主な仕事である、「標準日本語」の創出を中心とする国語・国字問題、「国民文学」の確立の提唱、農村共同組合の提唱を中心とする農業問題について検討したものですが、これらの問題は、タカクラが自由大学運動から農民運動に関わる中で培われてきたものであることを指摘しています。

一方、大谷俊さんは、「タカクラ・テルの思想と自由大学運動」（日本社会教育学会第 58 回研究大会発表資料、2011 年）において、京都帝大を出ながら、「学問」にまとわりつく、あらゆる「出世」を拒否して、農村の中で、「民族」と「科学」のあり方を問うたタカクラ・テルという一人の知識人の思想転回を、自由大学という社会教育実践との出会いにおいて再検討しようという意欲的な研究を発表されています。大谷さんは、その中で、タカクラの思想は、「帝国大出のある青白いインテリが、「教養主義」とそれの持つニヒリズムを、自由大学という社会教育実践を通じて出会った農村という現実の「問題」に「実践的」に向き合う中で、克服していった軌跡そのものである」とし、したがって、教養主義の議論は、少なくともタカクラにはあて

はまらない、と述べ、同時に、タカクラは、「自由大学を通じて、「農村」に出会い、それによって、「共産主義」と出会った。しかし、この「農村」との出会いこそが、彼とファシズムとを結びつけることを可能にした。彼は、「農村」に入ることで、農民や語るべき他者と出会ったが、同時に、ファシズムとも出会った」と指摘しています。この大谷さんの指摘は、昭和恐慌期にタカクラが自由大学運動から農民運動に重点を移し、上小農民組合連合会や西塩田村小作争議を指導した問題には触れてはいないものの、タカクラがなぜ「転向」をしたのかという問題に検討をせまるもので、自由大学研究にも大きな問題提起をしているものとなっています。

(3) 自由大学研究の現在

長野大学は、2005（平成 17）年度、総合科目「上田自由大学とその周辺」を開講し、自由大学研究に関わった研究者が講師として招かれ、その講義録が長野大学編『上田自由大学とその周辺』（郷土出版社、2006 年）としてまとめられました。同書には、山野晴雄「自由大学運動の歴史」、小平千文「上田自由大学を創設し運営した青年たちー金井正・山越脩蔵・猪坂直一ー」、米山光儀「タカクラ・テルと自由大学」、 黒沢惟昭「自由大学と「教養の問題」、長島伸一「自由大学運動と聴講生の学びの実態」、上原民恵「深町広子と上田自由大学」、中野光「大正自由教育と自由大学運動」の 7 本の論文と、資料として、山越脩蔵の「信濃自由大学（未定稿）」、長島伸一編「自由大学関係文献目録」が収録されています。

多くの論文は、これまでに発表した論文をもとにしながら新しく書き下ろされたものですが、近年の研究成果も取りいれられているものもあり、同書によって、自由大学研究の現在をある程度知ることが出来るものとなっています。

その中で、長島伸一さんの「自由大学運動と聴講生の学びの実態」は、のちに「自由大学運動の歴史的意義とその限界」（『経済志林』第 74 巻第 1・2 号、2006 年）と改題・加筆されていますが、「可能な限り過去 40 年以上にわたる自由大学研究の蓄積を踏まえ、併せて比較的最近の動向にも留意しながら」、自由大学をめぐる論点を整理し、自由大学運動の歴史的意義とその

限界を明らかにしています。長島さんは、その中で、(1)自由大学運動の歴史的意義として、「自由大学は、個人主義的な立身出世主義とも実利主義とも無縁な、社会性を背後にもった自己教育機関」であり、特定の学説や思想を「批判的に吟味して自己判断を下しうる「自律的人格」を養成する機関」であったがゆえに、「佐々木忠綱のような、いわば〈地域を変えうる教養人〉とも呼びうるような人物の輩出も可能であり、そこに計り知れない社会的意義があった」こと、(2)自由大学はいかなる学説や思想をも「排斥」したり「拒否」したりはせず、「各自の批判的な吟味、真理を追求するプロセスが大事と考えたのであり」、それは自由大学の「限界」どころか、「むしろクリティカル・シンキングを要請する自由大学の優れた点である」と評価したこと、(3)しかし、自由大学の限界として、これまで「自学的」「自治的」という自由大学の原則ないし特徴は肯定的に評価されてきたが、疑問であるとし、自由大学の実態に照らしてみた場合、講師が日常的に教育支援のできる体制にはなっていなかったことや高等教育への準備教育（導入教育）が周到に用意されていなかったこと、「被教育者本位」の自治への配慮も不徹底であったことなどをあげて、「理念と実態とが乖離していた点を無視ないし軽視するすることは、自由大学運動の歴史的意義を正確に把握する途ではない」ことを指摘しています。

長島さんの指摘は、近年の研究成果をふまえつつ、自由大学運動のもつ意義と限界を明らかにしたものであり、いくつかの論点を含め、今後、さらに検討を進めていくべき課題を提示した研究だと考えています。

自由大学運動が 1921 年に長野県の上田で始められてから 90 年目を迎え、自由大学研究は 40 年以上にわたり研究が蓄積されてきました。私自身の自由大学研究とともに、40 年以上にわたる自由大学研究の軌跡を私なりに跡づけてきましたが、この 90 周年記念集会を機に、さらに研究が進展することを期待して、私の報告を終わらせていただきます。